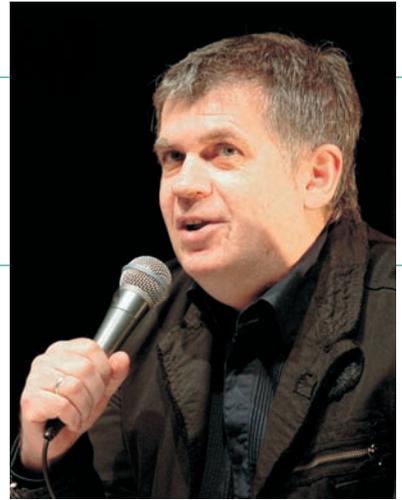


ソ連解体後の 中央アジア演劇界を牽引する マルク・ヴァイル氏

●イルホム劇場 [ウズベキスタン] 芸術監督

Mr. Mark Weil

マルク・ヴァイル●1952年、タシケント生まれ。72～75年、レニングラードにてポリショイ・ドラマ劇場のトフトストノーゴフ、モスクワにてタガンカ劇場のリビエーモフに学ぶ。76年、旧ソ連のタシケント（現在のウズベキスタンの首都）に、同国初の独立劇団としてイルホム劇場を創立。その先鋭的メッセージは「不同意の演劇」と呼ばれ、82年のモスクワ公演がスキャンダルとなる。89年、演劇学校を併設。93年に国際演劇祭を開催するなど、海外との交流も活発に行なう。2007年3月、ジャパンファウンデーションの招きにより、松本、東京で『コーランに倣いて』を上演



イルホム劇場を取り巻く演劇の歴史は、中央アジアにおける政治・社会・文化の変化の断章である。旧ソ連第4の都市タシケントでヴァイル氏がイルホム（アラビア語で「インスピレーション」の意味）を創設した当時、あらゆる文化は官の統制下にあり、政府と関わりを持たない独立劇団の誕生はおよそ考え得ない事件だった。国営劇場の公演がはねたあとの夜遅く、公認の演劇に飽き足らない俳優たちがイルホムに参集して自分たちの芝居を演じ、それを知る多くの観客が集まったという。ヴァイル氏は、「われわれ芸術家は、すでにさまざまに準備を整えていました。それらが結果として、80年代後半のペレストロイカに繋がったのです」と語る。91年のソ連の解体は、「共存」の崩壊をもたらした。「宗教的帰属意識が共産主義に取って代わり、ある日突然、互いに石を投げ合うようになったのです。この状況をどう理解したらよいかという思いから、中央アジアの歴史や文化に取材した作品づくりが始まりました。中央アジアの歴史は、本来ここが異文化に対して寛容な地域であることを示しています」。なかでも、旧ソ連全域の国民詩人プーシキンがイスラムの聖典コーランに触発されて書いた詩を原作とする『コーランに倣いて』は、完成まで2年半を要した。2002年2月タシケントでの初演当時、イスラム保守派と反イスラム派の双方から批判を受けたが、毎年再演を続け、独、露、米国に招へいされている。その一方で上演を断念する国や劇場も少なくないといい、ヴァイル氏は日本の観客に「私た

『コーランに倣いて』日本公演の1シーン。日本で中央アジアの現代演劇が本格的に紹介されたのは、これが初めて 撮影：古屋均（上も同じ）



ちのレパートリーの中でもとくに困難なこの作品を選んだ日本に敬意を表したい」と挨拶した。かつてプーシキンがコーランに触発されて詩を書いたように、自らもまたそのプーシキンの詩を解釈してみようというヴァイル氏の試みは、観る者に現代における寛容を問うメッセージであるとともに、対象が何であれ創造の自由を獲得するという強い意思の表れでもある。☺（河野明子）

（本誌58ページに『コーランに倣いて』の上演とその意義について触れた鴻英良氏の論考が掲載されています）